

< 2019年8月 >

古賀 順子

「ニース 『シャガール美術館』」

3年前の2016年7月14日、ニースの夜の花火大会に集まった人々を襲った無差別テロ事件は記憶に新しい。「天使の湾 (baie des Anges: ベ・デ・ザンジュ)」と呼ばれるニースの美しい地中海の湾。その「プロムナード・デ・ザングレ (promenade des Anglais)」通りで、ニース在住チュニジア人テロリストが2kmをトラックで暴走し、死者86名、重軽傷者458名を出した悲惨な出来事だった。遺族の気持ちを思い遣りながらも、今年から花火大会が再開された。テロ事件以後、ニース市の警備体制は厳しく、8月のバカンス客で賑わう浜、花市場、商店街、駅や空港など、人が集まる場所では銃を持った軍隊、警官、警備員の姿が目につく。いつ、どこで起こっても不思議はないフランスのテロ脅威を実感させられる光景である。

とは言え、南仏の強く明るい光に輝く地中海、山の手延びる色とりどりの町並み、南国の花々、港の風景、開放的な人々の笑顔は魅力に満ちている。

ニースに来ると必ず行きたい美術館がいくつかある。その一つがシミア地区にある「シャガール美術館」。地中海の光と色を愛したマルク・シャガール(1887-1985)が聖書のメッセージを伝える17作品をフランスに寄贈し、当時の文化大臣アンドレ・マルローが国立美術館として展示の場を提供し、1973年開館した。「創世記」「出エジプト記」「ソロモンの雅歌」のエピソードを題材に、『ダビデ王』(1951年)(198x133cm)、『出エジプト』(1952-1966年)、『アブラハムと3人の天使』(1960-1966年)(190x292cm)、『ノア方舟』(1961-1966年)(236x234cm)など、赤、青、緑、黄のシャガール独特の色の世界を表現している。

美術館内には、モザイク画の外壁、ステンドグラスのオーディトリウムもあり、97年の長い歳月を生きたユダヤ人画家シャガールの創作への思いを感じることができる。

第一次世界大戦、ロシア革命、第二次世界大戦といくつもの戦争を経験し、絵を描くことで虐殺されるユダヤ人に報いた画家。エコール・ド・パリの画家と位置付けられるが、野獣派(フォービズム)、シュールレアリスム、キュビズムと様々な流れの中でも独自の道を歩んだ。生まれ故郷のヴィテブスクの風景、そこで見慣れたラビと動物たち(牛、ろば、雄鶏)が繰り返し描かれている。

1948年、シャガールは亡命地アメリカからパリに戻り、1950年ニースに近いヴァンスの町に家を購入する。1952年ユダヤ人女性ヴァレンティナ・ブロードスキーと再婚。南仏に移ったシャガールは、創作テクニックを広げ、セラミック、ステンドグラス、タペストリーなどを取り入れるようになる。ニースに近いヴァロリスの窯場はピカソと同じアトリエである。1955年ヴァンスの礼拝堂の装飾を機に、聖書のメッセージ連作が生まれる。以後20年間、フランスのメッセ大聖堂とランス大聖堂、エルサレム、ニューヨーク国連本部、チューリッヒにステンドグラスを残している。パリ・オペラ座の天井画、ニューヨーク・メトロポリタン・オペラハウスの壁画もこの時期に手掛けた作品である。1985年3月、ニースに近いサン・ポール・ド・ヴァンスで97歳の生涯を閉じるまで、シャガールは南仏の光と色に満ちた創作を続けた。

「シャガール美術館」のコレクションには、1903-1914年ロシア初期、1914-1922年ロシア時代、1923-1939年パリ時代、1941-1947年第二次世界大戦とアメリカ亡命時代の作品も収められている。ステンドグラスのあるオーディトリウムではシャガールのインタビューが画像とともに上映されている。「キャンバスに向かう時、迷いはない。何を描くべきか見えている。手がひとりで動く。目はキャンバスではなく、私の内面を見ている。」深い言葉だ。

ニースからサン・ポール・ド・ヴァンスを経てヴァンスへ。シャガール美術館、マチス美術館、マグ財団、マチスのロザリオ礼拝堂が南仏の太陽と青い空の下に立っている。人生の光と色を求めて南仏を訪れる人々に幸いあれと言わんばかりである。